随筆

スリランカの想い出

＊

日下部芳志●日下部皮膚科医院（小田原市）

スリランカへの途上２泊だけ滞在したモリジブ諸島のホテルを空から眺めて（写真１）、青や黄色、紅の鮮やかな熱帯魚やナポレオンフイッシュ、部屋からビーチに続く白い砂浜（写真２）、ちょっと脅されたサメの事等思い出し、後ろ髪を引かれながら溜息をついていたら、２時間程でスリランカ国際空港へ着いてしまった。

空港では自動小銃を肩に掛けた兵隊が要所を固め、何となく緊張が走る。なんだか昔の共産圏へ入った様な気がした。しかし、手荷物を取って外へ出ると、友人のＭ氏が笑顔で迎えてくれた。彼に言わせると２年前から去年（2009年）までは、少し内紛が有り緊張感もあったが、今は至って平穏であると。迎えの車に乗りニゴンボと言う海辺の漁村に向かう。道路は一応舗装されているが、両脇は土のままである。ゴミが多い。港には多くの漁船が犇めき、カツオが炎天下に山積みになっていた。海辺へ行くと、そこはアラビア海、インド洋の端、波も大きく荒れていた。堤防に近くバラックが散在し（写真３）、子供達が興味深げにこちらを見ていた。裸足に短パンだが、笑顔の眼はキラキラ輝いていた。ふとターナーのスケッチ「ジプシーのキャンプ」（写真４）を連想した。

昼食は海辺のホテルへ。スリランカ料理という。やはり文化圏が近いせいかインド料理に似てどれもスパイシーだ。北の海岸で獲れた1.6kgの青みがかったロブスターも頂いた。同行のＵ先生曰く「大きい割に味がしっかりしているね。」と。同感、美味しかった。近くにＭ氏の知り合いの宝石店があると言う事で立ち寄った。白髪混じりの如何にもアラビア人

写真１：滞在したモリジブのホテル。上空より

写真２：ビーチに続く部屋からの眺め

写真３：浜辺のバラック

写真４：ターナーのスケッチ「ジプシーのキャンプ」

写真５：9.11カラットのインペリアル・トパーズ

写真６：海岸で水浴びをする人々

と見られる彼は、両腕を広げて我々を迎えた。店は小さく地味である。やはりサファイアが主でタンザニアのルビー等もあるが、一級品は無さそうだ。ただ見るだけである。と、やや黄色みを帯びた透き通った石が目に付いた。彼は無関心の様にインペリアル・トパーズだと言った。9.11カラット有ると。値段を聞いたら思ったより格段に安かったので、記念に求めた（写真５）。

泊まりは、コロンボへ。海辺のホテルで、M氏に夕方の散歩に誘われた。丁度土曜日だったせいか、海岸は多くの家族で溢れていた。皆それぞれに砂浜に入り、服のまま波を浴びている。まるでガンジス河の沐浴を見ている様だった（写真６）。夕焼けに染まるインド洋を背に、幸せな家族のシルエットをずっと眺めていたら、ふと、映画『カリートへの道』のラストシーンのタイトルバックを思い出した。

翌日は古都キャンディ市へ。チャンドラ先生のキャンディ教育病院を訪ねる予定だ。またM氏の自宅もそこにある。道すがら、路肩の舗装されていない道路の両脇で、時々果物を売っている。ランプータン、マンゴスチン、パイン、ドリアン、ポロマダ（ヤシの実の結晶、曰く「旅人の水」と）等々。一番印象に残ったのは、Thorn（トルン）と言うチェリモアの様な白く甘酸っぱい果肉の中に黒い種の入った物だった。M氏曰く「癌に効く」と。どれも豊かな南国の宝に思えた。キャンディ市の手前に「ペーラーデ」と言う植物園があった。入園料は外国人600ルピー（Rp）（約500円）。現地人30Rp。入口は異なるが、入ると現地人のM氏と同じ所に出た。少し笑えた。しかし、そのスケールは想像以上で、総面積は5.6平方キロ。熱帯、亜熱帯の大きな木々が整然と生え、多くの花々に囲まれた散歩道や、芝生の広場、池や庭園もあった。

その夜我々は「ペラヘラ祭」へ出かけた。信仰する神々を祀り、ご神体を象の背中に載せて街中を練り歩く、スリランカ一の祭。今日はその初日と。メインストリートの一角に、トタン屋根と椅子席を設けた特別席で１時間程待つと、夕方７時からそれは始まった。着飾った象が１～３頭並んでやって来る。その前後に20～30人の集団が剣や太鼓等を持って飛び跳ねながら踊って行く。暗くなると、着飾った象は夫々、赤、青、黄色等の小電球を散りばめて、まばゆいばかりである。その両脇は篝火を持った一群が、時々燃料の乾いたココヤシの殻と油を足しながら行進する。よく見ると、中に一山はあろうかと思われる象の糞を除去する係りもいる。２時間半程、もうもうと煙る中の行進は続く。そう、ねぶた祭りと、リオのカーニバルと阿波踊りを足した様な感じで、圧倒された。この間中、人込みは動かず、じっと座って終わるのを待つしかなかった。最後尾が去った後立ち上がっても、危険を感じてしばらくは待機した。大きな池の周囲を廻って、白亜の仏歯寺の脇に来た時、先程の象達が三々五々帰って来ていた（写真７）。その寺の周囲でヤシの葉等を食べて、向こう10日間程の祭りを完遂すると言う。

翌日はチャンドラ先生に会う。キャンディ教育病

写真７：仏歯寺の前を行く着飾った像

院の理事長で医師。温厚な方である。スリランカの医療は国公立病院の場合患者負担は０％だが、市中の個人病院では100%自費との事。その病院の皮膚科医は２人だった。多忙は目に見えた。

少し現実に戻った所で、山の茶畑を見に行く事になった。ヌワラ･エリヤと言う標高1,600m程の所に、段々畑が、山一面に広がる。麓の村や谷川から、雲の掛かった山頂までの絶景が眼前に広がる。イギリス統治時代に開墾された紅茶畑だ。良く見ると、山腹に白く小さな物が、点々と僅かに動いている（写真８）。茶摘みの労働者達だった。その白い物は頭から下げた麻袋と判った。車を進めると道路脇の茶畑でも一所懸命茶葉を摘んでいた。重労働だ。M氏曰く「開墾に当たって､過酷な労働に耐えたのは、イギリス人がインド南部から連れてきたタミル人の一部族のみだった。故に今もここではその末裔が多い。」と。しばらく行くと、アジア最古のゴルフ場、ヌワラエリア・ゴルフクラブがあった。同行のU先生に誘われるままにクラブハウスへ直行。ハーフプレイだけ特別にさせて頂いた。イギリス人が作ったゴルフ場だけあって、谷や小川はそのままで、自然を尊重する精神が伺えた。コース脇には、ぎりぎりまで粗末な民家が迫る所もあり､ボールを無くすと、何処からともなく人が現れ探してくれる。もちろん成功報酬である。ゴルフクラブのスコアカードには

写真８：ヌワラ・エリヤの茶畑

「紳士のスコアカード」と書いてあった。ハーフで十分楽しめた。

箱根の七曲りの様な山道を戻りキャンディに帰ったのは夕方だった。その日は友人のM氏の宅に招かれていた。ペラヘラ祭を迂回して郊外から向う。時折三日月が見え、その下に十字に輝く明るい星が見えた。詳細に見ると数個の集合体の様だ。南十字星に違いないと心が弾んだ。M氏のご家族は、夫人と１男３女。ごく普通の家ではあるが、庭にはマンゴを始め、様々な果物が植えられ、落ち着いた雰囲気の信仰深いご家族だった。なんと我々はイスラム教徒のご家庭に、断食月のラマダンの最中とも知らずにお邪魔してしまったのだ。M氏曰く「断食を破った日は数えないで、その分を後で足せば許される。」と。少しホッとした。心のこもったスリランカ料理を御馳走になり、ホテルに戻った。

翌日はコロンボに戻りクリニックを見学。その後M氏のマンションでくつろいでいると髭のスリランカ人登場。今日はスリランカ屈指の宝石商と。始めは普通の石なので、もっと良い物は無いかなと言う素振りを見せると、やおら腰に巻いていた革袋を取り出した。中からは15.5カラットのブルーサファイアが。まるでその底に、星々を隠しているかのごとく、キラキラと目も眩むほどの光を発していた。値段にも目が眩んだ。30カラットのスターサファイアも出てきた。流石に宝石の国。インド洋の真珠と言われ、昔はソロモン、シンドバッド、マルコポーロ等の人々から、最近はチャールズ皇太子のブルーサファイアまで枚挙に遑ない程の宝石を世界に供給しているだけの事はあると、ただただ感心した。まだまだ、発展途上の国と見たが、美しい豊かな自然や、宝石、果物、そして素朴で穏やかな人々。なぜか昔懐かしい気がした。スリランカは1952年、日本の国際社会への復帰を真っ先に支持してくれた国でもある事を後から知った。

おどろきモモの木クリニック・パートXⅧ

宮本秀明●宮本皮フ科（横浜市磯子区）

1．夜逃げのスキャット

「るーるるるるー、るーるるるるー…、監視し合う銀行の融資は止まるの～、金の無い世界に院長は行くのよ～、資金は流れず、借金も消えない、取り立て屋の怒号響くだけ～、るーるるるるー…」

……夜逃げと簡単にいうが、それ自体にも費用が要る。昔読んだ「夜逃げのノウハウ本」には「夜逃げ資金はサラ金で借りろ。５年間逃げていればチャラになる。住民票はその間移動してはならぬし、借金は１円も返済してはならぬ」などと記載してあった。しかし幸運なことにこのノウハウを役立てる機会を辛うじて免れ、シャッター商店街の一角にあるM皮フ科は開業８年目に突入した。

その昔米国のバンティング博士は開業はしたものの、M皮フ科も真っ青なほど（かどうか不明だが）クリニックがあまり暇なため大学の図書館に行き、糖尿病に関する論文を読みあさった。沢山の文献に目を通しているうちに、当時誰も思いつかなかった、膵臓からインシュリンを抽出する方法が閃いた。そこでソリの合わない教授の所に押し掛けて、百恵もびっくり！「ひと夏の経験」（夏休みのたった２ヶ月間）の犬の実験で抽出に成功、その不仲の教授とともにノーベル医学・生理学賞受賞となった（1923年）。たった２ヶ月の実験でノーベル賞とは、まさに天才である。

また、iPS細胞の山中伸弥教授は「整形外科医になったものの、不器用なために手術の邪魔になるので『ジャマナカ』と呼ばれ臨床医を諦めた」結果がノーベル賞受賞となった。それに対しM皮フ科院長はなまじ手先が少し器用だったために粉瘤やホクロを取ってはチャチな論文を作成して悦にいっているうちに、閑古鳥の鳴く皮フ科クリニックで呆然と日々を送る羽目になった。レ・ミゼラブル！

2．沖縄で

初対面の人に「ところで御出身は？」と尋ねた時「私の出身はオンナのインブです」という返事だったら面喰う。「ん、まあ（帝王切開以外は）大概の人間はそこから出て来てますからなあ」などとやり過ごすしかあるまい。

恩納村は沖縄本島中部の西海岸に位置し、北西に東シナ海を望む細長い地域である。伊武部は恩納村の北部にあり、一帯のビーチも「いんぶビーチ」と呼ばれ、観光案内にも当然の事ながら恥ずかしげも無く名前がデカデカと載っているが、名前に釣られてインブをさらけ出したままビーチに出れば、おそらく悲惨な結果が待っているだろう。

その昔、豪雨時に川の堤が破損した時、沖縄県庁に「恩納の伊武部の土手破損」との電文（全部カタカナ！）を打ったところ「名護の病院に連れて行け」と返電が有った話があるが、真偽の程は不明である。

3．クレジットカードいろいろ

会員になるだけで頭が冴えてくる「お利口カード」というのがあると聞いたので調べたところ「オリコカード」であった。オリエントコーポレーションが発行元なのでそういう名になった。他にも「オリヒメ（織姫）カード」「カルワザ（軽業）カード」「アクシュ（握手）カード」など面白い名前がある。

また年齢制限があるのもある。「18歳以上」とか「20歳以上」というのはリーズナブルだが「30歳以下」なんてのがあるかと思えばａ.「50歳から64歳まで」ｂ.「65歳以上」なんてのもある。200km以上の鉄道運賃･特急料金をそのカードで支払えばａ.は５％引きで、高齢者向きのｂ.は30％引きであるが、割引を謳いつつ「歳を喰えば長旅は余りしないだろう」という、割引したくない根性が丸見えである。

ゴールドカードは年会費が高いので敬遠していたが「電話、通信、携帯料金が割引」に加え「創立15周年記念キャンペーン、１万５千円キャッシュバック」というフレーズに誘われて、気がついたら入会していた。よく見れば「入会後４ヶ月間に15万円使えば…」という条件付であったが、めでたく１万５千円ゲットした。しかも「１年間で100万円以上使えば年会費はタダ！」である。公共料金（診療所の分も合算可）とスーパーの食料品もカード払いにすれば嫌でも100万円超えてしまい随分得した気がしたが考えてみれば年会費なんてのは、入会しなけりゃ払わなくて済む金であった。

４．東海道中ビッ栗毛

横浜から下りの東海道線に乗ったら幾組かの微笑ましい親子連れに出会った。

イ．藤沢駅の名所案内の「遊行寺（時宗総本山）」を指差しながら「時宗総本山とは鎌倉時代に蒙古軍を迎え撃った北条時宗を祭った寺だ」と子供に説明している。しかしこれは「ときむね」ではなく「じしゅう」と読み、鎌倉時代に起こった仏教の一派である。日本史の教科書にも載っているんだがねー。

ロ．また別の父親は大磯を過ぎて二宮駅に着くと「ここは二宮尊徳の生誕地だ」と教えている。二宮尊徳の故郷は実はここではなく、あと３つ先の小田原駅で小田急線に乗り換えて３つ目の「栢山（かやま）駅」のそばにある。

ハ．小田原を過ぎ真鶴に差し掛かって海側を見渡すと島がぽっかり浮かんで見える。「伊豆大島が見えて来たよ」と微笑みながら子供に指差しているがそれは初島である。目を凝らしてみると初島の背後にうっすらと大きな影が見え、それこそが伊豆大島であり、東京都に属する。初島は静岡県熱海市の一部である。

５．核兵器など要らない？

ある軍事評論家の記事を数年前（勿論、大震災の前）に読んで、世の中には頭の良い人がいるものだとひどく感心した。「命中率の良い長距離ミサイルさえ有れば良い。これで敵国の原発を狙えば核兵器など要らない」と言うのだが、２年前の福島原発の事故直後には余りにも不謹慎なので文章にするのは流石に気が引けた。しかし最近の政府はどうも急に原発を止める気も無さそうである。原発に核兵器の原料となるプルトニウムを溜め込んでさえいれば、日本の技術が高いのは定評なのだから「核兵器なんかいつでも作れるよーん」と他国を脅すことだって可能かも？　核兵器を作るためには「技術的困難さよりも『作ってもよい』という法案を国会で通す方が難しい」とも言われている。

世間は放射能を怖がるのに、海外では核実験場が観光スポットになっているそうだ。27年前に原発事故が起きたチェルノブイリでさえ今では人気の観光地である。

50数年前に水爆実験がなされたビキニ環礁、これはマーシャル諸島共和国という世界で７番目に面積の小さい国にある。ここも人気スポットの１つだそうだが、ビキニ環礁をビキニ鑑賞かと勘違いしてる訳でもあるまいに。

６．医学部面接は魑魅魍魎（ちみもうりょう）？

2012年12月の××新聞で「Ａ大学医学部医学科（地方の某国立）の春の入試で、筆記は高得点だった女子受験生（18）が、前後期とも面接で０点で不合格になった」という記事があった。彼女はＡ大学（記事では実名）の地元都道府県の出身で、高校には合格はしたものの健康上の理由で全く通学しておらず、高校１年にあたる年に高校卒業程度認定試験に合格している。面接試験がもし117点（200点満点）だったら前期で合格していたそうである。「翌年は別の大学を受ける」そうであるが、拙文が活字になる頃には結果が出ているであろう。

はたして「国立大学は平等な見解で面接試験をしている」のだろうか。「本当に欲しい学生は、自県と両隣の県出身の男子」というのはＡ大学とは別の某地方国立大学医学部教授の腹の内、とも聞く。また女子学生を締め出すために２次試験を数学だけにしたり、生物で受験できないようにしたり…の工夫？をしている所もある。都会からの受験生を入学させても卒業したら大体都会に帰ってしまうので国立大医学部の「推薦入学」ってのは大抵の場合、都会の受験生を締め出すためにある。ましてや地方の公立大学医学部を他県から目指す受験生は国立よりもさらに注意が必要である。偏差値だけで受験校を選んだりせず、敵地に臨むつもりでその他の条件を吟味しなければ合格は覚束無いかも知れぬ。

面接の無い国立大学も少しだがあるが、偏差値が高い大学が多い。また面接試験はあるものの精神異常を見分けるに留めて結果は○か×かであり、点数をつけないところもある。

小生の友人の友人は、ご子息が面接で不利になるのに気付き、筆記さえよければ合格する大学を夫婦で力を合わせて選び出した。首都圏からは飛行機でなければ行きにくい程遠かったが、出雲大社にもお参りしてきたらご利益があったのか合格し、卒業後は出身大学の都道府県からは即飛び出した。

M氏は地方の△△大学医学部の最初の卒業生であるが、当時は面接などなく筆記試験だけだった。もし面接があり「過疎地診療」や「卒業後の進路」などの質問に正直に答えていたら無論現在のM氏はなかろう。今となっては素直に筆記試験だけで拾ってくれた大学に感謝するしかない。

＊＊原稿募集＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

随筆・写真・イラスト・絵　何でも歓迎いたします！
写真、イラスト、絵は表紙に掲載させていただく場合もあります。

随筆は原稿用紙 10 枚まで、手書き・パソコン作成を問いません。
筆者の顔写真（スナップ可）を一緒にお送りいただければ幸いです。
原稿・写真は e-mail でも受け付けます。
３月末日までにいただいた投稿は、７月発行の号に掲載させていただきます。

宛先

〒220-8521 横浜市西区みなとみらい３－７－３
けいゆう病院　皮膚科　河原由恵
Tel 045-221-8181 Fax 045-681-9665
e-mail yoshie-k@gf6.so-net.ne.jp